

『コルナイ自伝』 発刊余話

盛田 常夫

一二月初め、出版社から在庫の報告があった。九月に2刷りが出てちようど三ヶ月になり、書店で売れ残ったものが出版社に戻ってくる。毎月六〇冊ほど売れています。返本があつて、一二月初めの在庫は前月より増えて三百冊弱です」という。硬質な書物だから、飛ぶように売れるという訳にはいかない。三月の一時帰国で3刷りのお祝いをするのは無理だなということになった。

部数の決め方

六月中旬の発刊と同時に、毎日新聞で経済書の書評担当である中村達也氏（中央大学教授）が取り上げ、七月下旬には日本経済新聞で青木昌彦氏（スタンフォード大学名誉教授）

が読書欄の「この一冊」という大きな枠組みで紹介した。この書評はインパクトがあり、翌日に「アマゾン売上げベストテン」入りした。

初刷りは一三〇〇冊だが、この二つの書評のお陰で、二ヶ月で在庫が尽きた。もともと、このうち三百冊は献本その他で贈ったものだから、実売は千冊である。定価四七〇〇円の高い本だから、初刷りが完売すれば出版社に損は出ない。それも二ヶ月で捌ければ、御の字である。

出版社は初刷りで儲けが出るようにしないと、ビジネスが成り立たない。しかし、専門書はよほどのことがない限り、千部単位で売れることはない。だから、専門書を出そうとすれば、著者の出資を前提しなければならぬ。それが現在の日本の出版事情である。

『コルナイ自伝』のケースも、初刷り部数がなかなか決まらなかった。部数を少なくすれば定価が上がる。

五千円以上になれば、買いたい人も二の足を踏む。かといって、出版社としては、部数を増やして無駄な在庫を抱えるのはコストが嵩む。五千円以下に販売価格が収まるように初刷りの部数が決まった。

予想外の書評

中村氏は一橋大学の都留重人門下で、コルナイへの関心が高く、出版前から問い合わせがあつた。青木昌彦氏はコルナイのスタンフォード大学客員教授時代の同僚で、二〇〇五年秋の国際経済学連合世界大会で次期会長候補として選任された。この大会まで会長を務めたのがコルナイである。この時に、「自伝」の日本語出版の話のコルナイ本人から聞き、書評を約束されたようだ。

青木氏は朝日新聞の経済書書評担当委員だったが、昨年三月で委員交代になった。朝日新聞で取り上げてもらえると思算段していたので計画が

狂った。しかし、思いがけず、青木氏から「日本経済新聞に長い書評文を掲載するように交渉している」というメールが届いて安堵した。

この後、予期せぬ書評が続いた。八月末に朝日新聞で、経済書書評担当の高橋伸彰氏（立命館大学教授）が取り上げてくれた。高橋氏は経済史専攻で分野も世代も異なり、面識もないから、まず書評対象にならないだろうと諦めていたから、これは嬉しかった。

九月には読売新聞で編集委員の布施裕之氏が書評してくれた。実は、佐藤経明氏（横浜市立大学名誉教授）から布施氏が書評することに決まったという連絡を受けていたが、なかなか出なかった。すでに他社の書評が出揃ったから、もう出ないものと考えていた。

意外だったのは、週刊「ダイヤモンド」と「週刊東洋経済」の書評である。「東洋経済」は、一昔前まで理

論経済学の特集などもやっていたが、今では両誌ともビジネスマン相手の情報誌である。とくに、一番売れているビジネス週刊誌「ダイヤモンド」が、「職種別・会社別の給料特集号」に、「コルナイ自伝」の書評を載せた。何とも言いようのないアンバランスである。この欄を担当している池田信夫氏（須磨国際学園理事）がコルナイ理論を高く評価していることが後になって分かった。

さらに、『文芸春秋』一一号で、猪木武徳氏（京都大学名誉教授）が取り上げてくれた。猪木氏とも専門分野が違うし面識はないが、小著『ハンガリー改革史』（一九九〇年刊）を『外交フォーラム』誌で書評していただけのことがある。

インターネット塾

発刊から程なくして、日本の友人から、専門ブログの世界で「コルナイ自伝」が話題になっているという

連絡を受けた。学生に「厨先生」とも通称されているカリスマ先生、稲葉振一郎氏（明治学院大学教授）がブログでさまざまな書物を取り上げて書評している。発刊一週間も経たないうちに「コルナイ自伝」が取り上げられ、絶賛してあった。

「ハンガリーどころか全ての社会主義経済の『改革』に引導を渡し、体制転換への理論的先鞭をつけた著者自身による、主要著作の学説的位置づけと裏事情開陳までを含めた懇切な解説もついていて、社会科学と社会主義、そして二〇世紀に関心のある全ての人にとって必読。四の五と言わず買え。そして読め。数式なんぞ一カ所もないから大丈夫」。

まことに強烈な託宣である。稲葉氏へのブログには熱心が学生だけでなく、同業の専門家なども意見を寄せている。そこから池田信夫氏のブログにも辿り着いた。稲葉氏は社会経済学の周辺を涉獵されているが、

池田氏は理論経済学やIT分野の書評などを広く手がけていて、「書評の達人」とも称されている。

その他にも、若い先生を中心に、専門ブログの世界が広がっている。これはいわば「インターネット塾」のようなもので、学習・研究意欲のある学生たちが意見を交換する場になっている。現代を象徴するような場の形成である。

在庫がなくなる？

一二月初めの在庫報告から一〇日も経たないうちに、「在庫がなくなりました。これは本当です。3刷りの準備に入ります」という連絡を受けた。一〇日前に三百冊もあったのにどうしてか。「経済週刊誌恒例の年末ベスト経済書に、『自伝』がランクインしたようで、年末フェアをやる書店から注文が相次いで、在庫がなくなりました」という。

この時初めて、「ダイヤモンド」が

経済書のランキングを発表しているのを知った。もともと、フェアが終れば返本もあるから、慌てて増刷するのは考えものだと思ったが、出版社としては注文があった時に、在庫がありませんとは言えないのだ。

それにしても、年間千冊は超える経済（ビジネス）関係の新刊書から、「コルナイ自伝」のような硬派な著作がベストテン入りしたのに正直驚いた。サラリーマンが電車で読むような本ではない。昨秋、堤（元ハンガリー大使）夫妻と東京でお会いした時に、奥様が「書評が出ているから飛ぶように売れているでしょう」と質問されたが、大使が即座に、「飛ぶように売れるほど、日本の知的水準は高くないよ」と答えられていた。ランクインには池田信夫氏の書評が効いていると思い、彼のブログを覗くと、「個人的な二〇〇六年ベスト経済学書」がランクされていて、「コルナイ自伝」が「文句なしの名著」

として第一位に掲げられていた。毎日新聞の年末の書評欄でも、中村達也氏が「今年の三冊」の最初に「コルナイ自伝」を上げている。

確かに、理論経済学の分野では他の追随を許さない名著だが、数多くのビジネス書を押しつけて、こんな難しい本が週刊誌のベストテン入りしたのは珍事だ。もともと、投票権を持つ経済学者・エコノミストの中には学生時代にコルナイ理論に出会い、今再びコルナイ経済学の全体像を開示した著作に注目した人々がいると考えれば、ベストテン入りの事情が飲み込める。その場合でも、理論専攻の学者・エコノミストの多くが第一位に投票しなければ、ベストテン入りは難しかっただろう。

理論経済学の世界

一般読者には理論経済学は縁のない世界である。テレビや週刊誌に出てくるエコノミストの世界とは違う。

国際的な学術雑誌で論文著作の引用頻度の多い日本の経済学者ランキングによれば、第一位が雨宮健スタンフォード大学教授、第二位が青木昌彦氏である。雨宮氏などは日本のメディアに出ないから、まず名前を聞いたことのある人は少ないだろう。

雨宮氏は国際基督教大学出身で、スタンフォード大学助手時代に母校に來校し、客員講義を開いた。後にノーベル経済学賞を受賞したアロ―ドブリューの一般均衡モデルを解説する授業で、数学の不動点定理の懇切丁寧な説明が印象的だった。六〇年代から七〇年代にかけて一般均衡論が理論経済学の玉座を占めた。コルナイがその理論的批判書である『反均衡』（邦訳『反均衡の経済学』日本経済新聞社）を一九七一年に出版した。もともと、一般均衡理論の現代数学的基礎を築いたのは、ハンガリー出身の数学者ノイマンである。同じハンガリー人が一般均衡

論批判の書を出したことが話題になり、コルナイの名が一躍世界の経済学で知られることになった。

青木氏は「六〇年安保」の全学連のイデオログとして知られている。その後アメリカに渡り、ノイマンが開拓した線型数学的手法を使う計画理論の分野で世界にデビューし、現在も第一線で活躍されている。

不思議な人の縁

六〇年安保当時、東大の玉野井芳郎教授の周辺に青木氏などの俊英たちが集まり、その後いろいろな世界に飛び出していった。少し歳月は下るが、国際基督教大学のキャンパスが閉鎖になった学部二年生の春、私は東大駒場に講義を盗み聴きに行った。『マルクス経済学と近代経済学』を出版されたばかりの玉野井教授、教育法の堀尾輝久教授、『歴史としてのスターリン時代』を上梓された菊地昌典教授などの講義を覗いた。

菊地教授が最初の講義に、「造反有理」という中国文化大革命のスローガンを黒板に記したのに驚いた。この時代は社会も学生も教授陣も皆、熱かった。

人の縁は不思議なもので、後になって堀尾氏とは日本書籍の公民教科書の編集で一緒に仕事することになり、菊地氏からはコルナイ理論講義の誘いを受け、ハンガリーに赴任する直前に駒場で半年の授業を受け持った。玉野井教授のお嬢さんとは法政大学社会学部のコンピュータ授業の教科書作成で一緒に仕事した。話が脇に逸れたが、コルナイの著作が名著として評価されたのは嬉しい限りである。多分、五〇年いや百年後にも、この著作は読まれるはずだ。もう古典的な名著と言ってしまうだろう。年間八万冊も新刊本がでる日本の出版界で、百年後にも読まれる本はそう何冊もないはずだ。